

## 最終処分場内で産廃 中間処理の許可可取得

フジコーポレーション（長野県佐久市）は、運営する直壁型最終処分場内の移動式重金属固定・セメント混練施設で、産業廃棄物の処理施設・処理業の許可を取得した。すでに昨年末一般廃棄物中間処理の許可を取得しており、一廃・産廃の中間処理が可能になった。同社は廃棄物からフジ式重金属・セメント混練により盛土材を製造、独自の圧密成形工法で全量を処分場内で環境基準を満たす安全で、強固な地盤として活用している。これにより排出者にとっては安全なリサイクルが確保される。また、従来の焼却や溶融処理に比べ、CO<sub>2</sub>排出量も大幅に削減できることから、環境負荷低減の効果も大きい。

## CO<sub>2</sub>排出減も寄与

同社はこの独自の手法を、処分場内でリサイクルを推進する「フジ式盛土材圧密成形工法」環境システムとして、積極的に展開を始めてい

る。同システムでは「フジ式盛土材圧密成形工法」と「フジ式雨水遮断管理工法」で特許を取得。また、昨年3月1日に施行された長野県の「廃棄物の適正な処理に関する条例」では、一廃・産廃共に事業計画協議終了第一号となった。

現在重金屬を含む廃棄物をマテリアル化しリサイクルする技術はいくつかあるが、再生品が長年に渡り環境面や人体に及ぼす影響についての検証はこれまで十分に行われていない。地域住民・排出者に対して、再生したものの品質に対する安全を保証することは、本来リサイクル業者の責務と言える。そのためには一定の限られた場所徹底した管理の下、マテリアル（盛土材）を使用することが生活環境への影響を予防的に回避することになる。こうした考えから、同社はこれまでになかった最終処分場でのリサイクルの再生品生産量に

サイクルに取り組み始めた。処分場内でリサイクルを行うことでデータ、文献の蓄積を進めていく。

また、現在リサイクルしても受け入れ先がなく行き場のないリサイクル品が大量に発生するという事態も各地で発生している。処分場の盛土材に使用することで、こうした行き場のないリサイクル品を生むリスクも回避される。「正しい需要に基づいた再生品生産量」となる。

さらに、廃棄物を焼却・溶融等で処理するのに比べ、CO<sub>2</sub>排出量を大幅に削減できる効果もある。同社の盛土材圧密成形工法によるCO<sub>2</sub>排出量は昨年2月から今年1月までの1年間平均で、1ト当たりわずかに6・34%にとどまっている。新政権が25%削減を打ち出した中、同社のリサイクルシステムは、CO<sub>2</sub>削減の観点からも注目を集めそうだ。

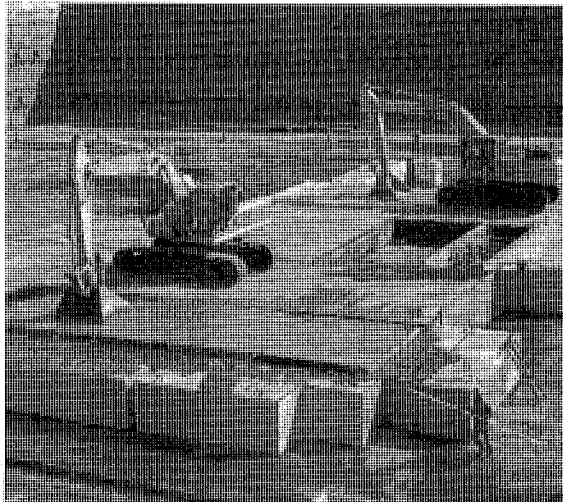
## 初回優良183業者が出席

都第三者  
評価制度

認定証授与式を開催

東京都が開始した優良な産業廃棄物処理業者を第三者機関が評価・認定する「産廃エキスパート」、「産廃プロフェッショナル」制度の認定証授与式がこのほど、認定機

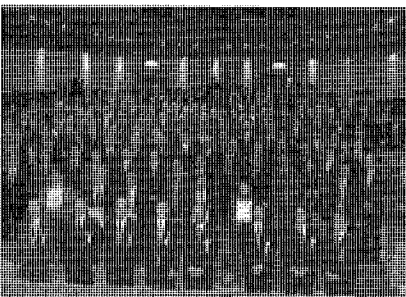
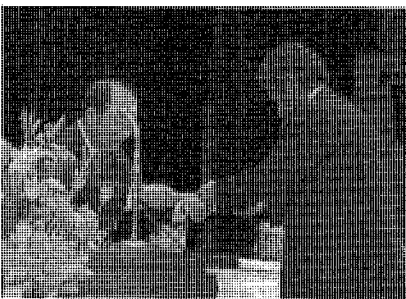
関である東京都環境整備公社の主催で行われた。



重金屬・セメント混練により盛土材を製造、独自の圧密成形工法で全量を処分場内で強固な地盤として活用

た、昨年3月1日に施行された長野県の「廃棄物の適正な処理に関する条例」では、一廃・産廃共に事業計画協議終了第一号となった。

認定書を受け取る高俊興業の高橋社長



認定業者183社の関係者が出席した